

創造表現学部 創作表現専攻

基礎演習Ⅱa・Ⅱb

プレゼミ選択のてびき / 各プレゼミ紹介

基礎演習Ⅱa・Ⅱb（プレゼミ）について

「基礎演習Ⅱa・Ⅱb」は、1年後期と2年前期の必修科目である。2年後期からスタートする「演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（ゼミ）の準備編（＝プレゼミ）として、各ジャンルの基礎的な知識や表現技術・方法を演習形式で学ぶ授業である。

科目名は、1年後期「基礎演習Ⅱa」、2年前期「基礎演習Ⅱb」となっているが、原則として同じ授業内容で開講される。学生諸君は**後期・前期それぞれ異なる演習クラスを一つずつ選択し**、ゼミ選択の指針とすること。

プレゼミ選択上の注意事項

① 小倉史、酒井晶代、角田達朗、永井聖剛、松田樹、柳井貴士、吉田朝香の7クラスの中から選択する。

押山先生のクラスは諸般の事情により開講しないこととなりました。履修を楽しみにしていた皆さんには大変申し訳ありません。ぜひ前向きに新たな履修先を選んでくださいますよう、お願いします。（専攻主任 角田達朗）

② 各クラスの定員（人数の上限）は**20名を目安**とする。

③ 所属先は各自の希望に基づいて決定するが、**定員を超えた場合には第1希望～第3希望までの間でできるだけ希望がかなうよう、調整を実施する**。詳しい日程は下記の通りである。

所属先決定までのスケジュール

2024 年 12 月 18 日(水)～2025 年 1 月 8 日(水)「プレゼミ(基礎演習Ⅱb)希望調査」提出期間
※CS で案内する Microsoft Forms の指定のリンクから希望調査フォームに飛び、回答を送信すること。

2025 年 1 月 8 日(水) 23:59 希望調査 送信〆切（厳守のこと）

1 月 15 日(水)頃までに 結果発表（Campus Square、専攻 HP にて）

※ 定員を超過したプレゼミは、専攻の教員による調整を行った上で発表する。

※ 希望が特定のプレゼミだけに極端に偏る等、想定外の事態が生じた場合は、やむをえず日程や方法を変更することがある。

プレゼミ選択について、相談や質問がある場合は、以下の専攻教務委員宛にメールで連絡をすること。

押山美知子 oym315@asu.aasa.ac.jp

酒井晶代 masaka@asu.aasa.ac.jp

上記の結果発表や調整に関する連絡はすべて Campus Square・専攻 HP にて行うので、所属クラス決定までの期間、常に CS 掲示板の情報に注意すること。

小倉 史

【授業の目標】

映画芸術について書かれた基礎的なテキストや映画化された文学作品を読みながら、映像とは何か、映像表現の持つ可能性と不可能性はどこにあるのか、それを受容する我々はどのような姿勢で映像と対峙すべきなのかをじっくりと考え、その結果を他者に伝える力を養います。また、次年度以降のゼミに備え、基本的な映像分析方法を修得します。

【授業計画】

文学、シナリオ、映画批評を、映像表現と対照して読み込むことにより、批評的な視野で作品を論じていきます。前半は、短編小説とその映画化作品とを比較しながら双方の表現の特性を探ります。後半は、映像作品そのものの分析方法を学び、実践します。

- | | |
|---------|----------------------------|
| 第1回 | イントロダクション |
| 第2,3回 | 調査・発表・レポートの書き方概論 |
| 第4回 | 文献講読準備 |
| 第5～8回 | 文学と映像表現――受講生による発表とディスカッション |
| 第9,10回 | 映像分析概説 |
| 第11～14回 | 映像分析実践――受講生による発表とディスカッション |
| 第15回 | 総論 ～映画評論および映画シナリオ執筆に向けて～ |

【評価方法】

以下の項目により総合的に評価します。

- ・受講態度と授業参加度（発言、質疑応答の様子など）20%
- ・発表の充実度（レジュメの内容、調査の質・量など）30%
- ・発表後の成果（発表後に提出するレポートと、添削後のブラッシュ・アップ）50%

【テキスト】

適宜指示する。場合によって、プリント教材も用意する。

【参考文献・資料】

- 『映画技法のリテラシーⅡ 物語とクリティック』
(ルイス・ジアネッティ著、フィルムアート社)

* 担当教員より *

まずはジャンルを問わず、様々な作品と出逢ってみましょう。ひとつの作品と対峙し、自分なりの「読み」を付与するという作業は、自らの表現を磨くうえでの第一歩となるはずです。また、このゼミでは「古典的」な作品も扱います。過去の作品の蓄積の上に自らの作品が成り立っていることも知りましょう。

映画は、文学、演劇、絵画、音楽などあらゆる分野を取り入れた総合芸術であると言われます。映像シナリオを書くことに関心のある人のみならず、ジャンルを横断しつつ作品を読み解いてみたい方の受講も歓迎します。

酒井晶代

【授業の目標】

演習形式の授業を通して近代日本児童文学の代表的な作家・作品を知ると同時に、文献探索をはじめとした調査研究の基本的な技術・方法を修得することを第一の目標にします。

さらに、学んだ知見を踏まえた作品制作を第二の目標とします。いわゆるパロディを執筆してもらうことになりますが、リサーチと実作を通して、児童文学というジャンルの独自性や可能性を考える第一歩にしたいと思います。

【授業計画】

明治から昭和戦前期まで、時代順に代表的な児童文学作家を取りあげます。ここ数年は対象とする作家を宮沢賢治と新美南吉に絞り、二人に関するさまざまな問いに各自が回答を試みる Q&A 方式で調査や研究、発表に取り組んでもらっています。

前半の授業では、個々の作家(あるいは、その作品)に関する基礎調査を通して、資料収集や分析、読解の基本的な方法を身につけます。テーマ別のプレゼンテーションと参加者間の質疑応答が中心になります。プレゼンをグループで行うか、個人で行うかについては、履修者の人数等を踏まえて決定します。

後半の授業は、各自が執筆した作品を相互に批評する合評会形式で行います。

- 第1回 半期間の計画提示
- 第2～4回 文献検索・情報探索の方法に関する講義
- 第5～7回 ピックアップした作家に関する発表(基礎編)
- 第8～11回 ピックアップした作家に関する発表(応用編)
- 第12～15回 実作発表と相互批評

【評価方法】

- 授業への参加態度(質疑応答や合評会での発言を含む)：40%
- 発表と課題(プレゼン、作品、期末レポート)：60%

【テキスト】

適宜プリントを配付します。

【参考文献・資料】

授業時に適宜紹介します。

* 担当教員より

たとえば「大人のための児童文学」という言い方があるように、「子ども」をどのように位置づけるかによって、児童文学というジャンルは広がりもするし、狭まりもします。児童文学はある意味とても窮屈なジャンルであり、反面とても自由なジャンルでもあるのです。近代児童文学の代表的な作家や作品に接することを通して、「子ども」という切り口から読んだり、書いたりする面白さをともに探っていけたら嬉しいです。

角田達朗

【授業の目標】

ストーリーを組み立てるために必要な基本的知識を身につけ、これを作品分析と創作に活用できる能力を養います。

【授業計画】

- 第1回 起承転結について復習する。
課題1を指示する。
 - 第2回 課題1にコメントする。
変則的なストーリー構成について講ずる。
 - 第3回 伏線と布石について講ずる。
作品分析1
課題2を指示する。
 - 第4回 ドラマ的構成について講ずる。
作品分析2－1
 - 第5回 作品分析2－2
 - 第6回 作品分析3－1
 - 第7回 作品分析3－2
 - 第8回 課題2によるグループワーク。
最終課題のためのプロット提出（準備課題）を指示する。
 - 第9回 課題2についてのコメント
 - 第10回 作品分析3－3
 - 第11回 作品分析4－1
 - 第12回 作品分析4－2
 - 第13回 作品分析4－3
最終課題（短編作品／ジャンルは自由）を指示する。
 - 第14回 準備課題を検討する。その1
 - 第15回 準備課題を検討する。その2
- *教材にはマンガと戯曲を使用します。**

【評価方法】

4つの課題・平常点（授業への積極的参加を評価する。）

【テキスト】

プリントを配付します。

【参考文献・資料】

授業内で適宜指示します。

*担当教員より

小説やマンガを読んだり、テレビドラマやアニメや映画・演劇を観たりは誰でもしていることですから、皆さんはこれまでも半ば無意識のうちに創作のための素養を積んできているはずです。しかし、それを実際に創作に活かすためには、無意識の蓄積を意識化することが必要です。この授業が、そのための手掛かりを提供するものになれば幸いです。

永井聖剛

【授業の目標】

近現代の日本を代表する作家の短篇小説を精読することを通して“自分の視点＝自分の言葉”で文学作品を読解するための技術や方法、歴史的なパースペクティブを養います。基礎演習という名のとおり、創作表現専攻のすべての領域に共通して必要なリテラシー（基礎的な読み書き能力）を身につけることも目標とします。

【授業計画】

近現代文学の短編小説を題材にしながら、小説を「読む」とはどのような営為なのか、小説はどのような問題意識のもとに成り立っているのか、作品を分析する方法にはどのようなものがあるのか、などを学ぶ。「読むこと」を自己充足的に解消させてしまうのではなく、他者に語るためには何が必要なのかを考え、学び、実践するための出発点としたい。

第1回 ガイダンス（発表の担当者決めなど）

第2～4回 読解の仕方、調査・発表資料の作り方などに関する講義（泉鏡花「夜行巡査」を題材にして）

第5回 樋口一葉「十三夜」を読む

第6回 田山花袋「少女病」を読む

第7回 谷崎潤一郎「秘密」を読む

第8回 志賀直哉「小僧の神様」を読む

第9回 芥川龍之介「舞踏会」を読む

第10回 梶井基次郎「檸檬」を読む

第11回 横光利一「街の底」を読む

第12回 堀辰雄「水族館」を読む

第13回 江戸川乱歩「目羅博士」を読む

第14回 三島由紀夫「橋づくし」を読む

第15回 大江健三郎「人間の羊」を読む

【評価方法】

授業（討議への参加・報告、A～F評価、70%）および期末レポート（論述力・応用力、A～F評価、30%）における総合評価。

【テキスト】

〈都市〉文学を読む（東郷克美・吉田司雄編 鼎書房）

【参考文献・資料】

授業内で適宜指示する。

* 担当教員より

この専攻には「書きたい」と漠然と考えている人が多いと思いますが、何を・どう書くべきなのかは、「読むこと」をきちんと対象化する中から浮かび上がって来るはず。この基礎演習を通して、作品を精読すること（批評・評論を書くこと）の面白さに気付いてくれることを期待しますが、授業内容自体は、小説創作を始めとして、本専修のあらゆるジャンルに共通するものですから、多くの学生の積極的な参加を希望します。

松田樹

【授業の目標】

現代の日本文学を、読む／書く能力を身につけます。創作を意識しながら現代の文学作品を詳しく読解し、またその読解を通じて自分なりの問題意識を見つけることで、批評と創作の書き手を養成してゆきたいと思います。

【授業計画】

文学作品を詳しく読む／文学作品を踏まえて書く、をテーマにしています。読むことなしに上手く書くことはできず、書くことで読みもまた一層深化してゆきます。この両者の繋がりを意識しながら、授業を展開してゆきます。具体的には、《基礎・読む・書く》の3部で構成されています。

《基礎》編では、大学で文学を扱う際に必要な資料の調べ方や論じ方を学習します。

《読む》編では、代表的な文学作品についてグループ発表を行い、作品の読み解き方を学びます。

《書く》編では、過去の文学作品を踏まえつつ、自身の問題意識を反映させた創作を行います。

第1回	ガイダンス	グループ作成とスケジュール確認
第2回	基礎①	情報収集どうするの？——ネットの使い方
第3回	基礎②	情報収集どうするの？——文献資料の使い方
第4回	基礎③	発表／執筆ってどうするの？——レジュメの作り方
第5回	現状確認	自由に作品を書いてみる
第6回	読む①	現代小説を読む——1970年代の作品発表
第7回	読む②	現代小説を読む——1980年代の作品発表
第8回	読む③	現代小説を読む——1990年代の作品発表
第9回	読む④	現代小説を読む——2000年代の作品発表
第10回	読む⑤	現代小説を読む——2010年代の作品発表
第11回	中間まとめ	中間まとめ——「読む」ことから「書く」ことへ
第12回	書く①	現代小説を書く
第13回	書く②	現代小説を書く&相互批評
第14回	書く③	現代小説をリレーする
第15回	書く④	現代小説をリレーする&相互批評

【評価方法】

発表・課題（60%）、平常点（40%）

【テキスト】

授業内で適宜指示する。

* 担当教員より

ある著名な小説家は、「なぜ書くのか？」と聞かれて「読んだから」と答えています。創作作品にしても、批評文にしても、書きたい論じたい、と思う初発の動機には、何かを読んで圧倒的な感銘を受けたという経験があるはずです。

この授業では、その感銘をより明確な言葉で言語化し、自らのものとする訓練を繰り返し行ってゆきます。それを通じて、創作にせよ、批評にせよ、自分の書くべきものを数段レベルアップさせていって欲しいと思います。

柳井貴士

【授業の目標】

現代文学を中心に、小説世界の多様性に目を向けながら、作品を分析、考察していきます。そのための方法、理論を知り、文学作品を読む力を養います。作品に向き合う方法を知ること、読む面白さが広がります。読む面白さを知ることから、「考える」「書く」力が充実していきます。読むための方法を学び、今後にかせる基礎力を身に付けることを目標とします。

【授業計画】

文学作品を読み進めながら、分析する方法、観点を学び、自ら作品を批評する力を養います。また適宜、映画や演劇なども参照していきます。表現とメディアの関係も学んでいきましょう。

- 第1回 ガイダンス——授業の説明（文学理論などの解説）
- 第2回 大学で文学を「やる」——資料収集・調査の方法
- 第3回 「書く」ことをめぐって①—「わたし」をめぐる冒険
- 第4回 「書く」ことをめぐって②—社会の中の「わたし」
- 第5回～第7回 「わたし」を決定づけた作品の紹介—プレゼント自己理解のために
- 第8回 「書を捨てよ、外へ出よう」（詩歌、エッセイ＋写真）の実践
- 第9回～第11回 課題小説創作と相互批評
- 第12回～第14回 「具体」と「抽象」を用いた作品創作と相互批評
- 第15回 授業のまとめ

【評価方法】

授業への参加姿勢／発表内容／期末レポート

【テキスト】

授業時に適宜紹介します。

【参考文献・資料】

『文学の方法』（東京大学出版会）

『文学批評用語辞典』（研究社出版）

他、適宜紹介します。

* 担当教員より

本授業では、創作や研究の基本となる理論、概念を知ることから始めます。そして学び得たことを「表現」の推進力として、創作や研究に挑戦してほしいと思います。

本授業では、小説をはじめ、映画、演劇、音楽などを出来る限り取り上げます。様々な表現方法を分析する力を身につけることで、それまでの「当たり前」な事象にノイズを見つけてほしい。そのノイズに気づくことが、今日のあなたを、明日のあなたへつなぐ原動力になるはず。小説を書いてみたいあなた、批評を書いてみたいあなた、「知」に関心のあるあなたを待っています。

吉田朝香

【授業の目標】

キャラ表・二点透視図を使った背景・フルカラーレビュー漫画の3つの課題を制作することで、漫画やイラストを描く上での基礎を学びます。

高い完成度を指すため、基本的にはペン入れ・ベタ・トーン作業や色塗りなどの仕上げまで行い、鉛筆描きは不可。

落書きで終わらせずきちんとした「作品作り」を目指し、色々な画材に触れたり、透視図法やネーム・構成等のストーリー作りを経験することで、創作の幅を広げていくことを目的としています。

【授業計画】

①キャラ表

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ラフ～下絵
- 第3回 下絵～ペン入れ
- 第4回 ペン入れ～仕上げ、完成

②二点透視図を使った背景(モノクロ1枚)

- 第5回 ラフ
- 第6回 下絵
- 第7回 ペン入れ
- 第8回 仕上げ～完成

③レビュー漫画(フルカラー1枚)

- 第9回 アイデア出し
- 第10回 ネーム
- 第11回 ネーム～下絵
- 第12回 下絵～ペン入れ
- 第13回 ペン入れ～色塗り
- 第14回 色塗り～完成
- 第15回 総評

【評価方法】

作品の完成度

課題に取り組む姿勢、熱意

出席率

【テキスト】

適時用意します。

【参考文献・資料】

授業の進行に応じ準備します。

*担当教員より

「絵を描く」という行為は、よくよく考えると「観察する」時間がとても長いのだと気づきます。

普段皆さんがしている「好きな物を見る」ということは、絵を描く基礎に他なりません。

自分が素敵だと思った物や世界を、自らの手で生み出すことができたなら…更には、それを誰かに「伝えること」ができたなら…。

この授業で「見る」ことから「描く」ことへ一歩踏み出し、「表現すること」の楽しさを少しでも感じていただければと思います。